

『戦士の遺書』

2022年10月17日

半藤一利氏の『戦士の遺書 太平洋戦争に散った勇者たちの叫び』を読んだ。半藤氏は、昭和史に精通した人で、昭和の戦争史を数多く上梓している。本書は、戦後50年経った1995年に単行本で出版され、1997年に文庫本でも出され、2022年8月に新装版が出た。

半藤氏は、戦死した人、戦争犯罪人として死刑になった人、自害した人など、28人の戦士たちの遺書を紹介し、彼らの人柄と戦いの実相を記している。半藤氏は本当に優しい人である。戦士たちの誠実で、勇敢で、律儀な人柄を述べ、彼らがいかに戦争と立ち向かったかを、篤い尊敬の思いを寄せて、書いている。私はこれほど疲れを覚えて、読んだ本はない。彼らの悲しい、残酷な死は涙なしには読めない。しかし、戦争や当時の世相を知らないけれど、開戦から敗戦までの経緯を学んだ者、そして、キリスト者として、怒りで心は耐え難くなった。軍人は、政府の意向に一片の反論もできず、上官の命令には、どんなに無謀と思えても従わなければならない。意思を持つ人間であることを認められず、死に逝く軍人は哀れである。戦争ほど、理不尽で狂気に走らせるものはない。本書を読んで、戦争がいかに人間を否定する罪深いものであるかを、多くの人に知ってほしいと思った。

『戦艦大和ノ最期』の著者・吉田満氏は、沖縄への特攻出撃の朝、両親宛てに遺書を書いている。「私ノモノハスベテ処分シテ下サイ 皆様マスマスオ元気デ、ドコマデモ生き抜イテ下サイ ソノコトヲ念ジマス」驚くほど簡潔であるが、戦後、生還してから、「ワガ生涯ノ一切ハ、母ガ愛ノ賜物ナリトノ感謝ヲ伝フル由モナシ」「ワレ幸ヒニ悔イナキ死ヲカチ得タラバ、喜ビ給ヘ」と、心乱れた心境を証している。吉田氏は、西片町教会の礼拝に見えていた。挨拶を交わしたくらいで、会話をすることはなかったが、誠実な人柄は態度に現れていた。片道の油しか積まず、突撃を覚悟の出撃に、悔いなき死は望めまい。

最も理解できないのは国定謙男氏である。彼は33歳で、31歳の妻と5歳、2歳の子どもと共に自決した。彼は無条件降伏を認めず、本土決戦を主張した。降伏受諾を主張した米内光政海軍相の暗殺を目論んだそうである。しかし、昭和天皇の降伏受諾が決定した時、自害を決意し「作戦停止ノ大命下リ海軍軍人トシテ日頃ノ信念ニ従ヒ自決ス」と書き遺している。名刺の裏に「陛下は彼らのために誤られました」と、天皇の降伏受諾を過ちと見なしている。半藤氏は「歴史の流れに逆らって憤死したというほかない」と書いている。

勝機のない戦場の硫黄島に送られた栗林忠道氏は、米軍が驚くほど、徹底抗戦した。大本営に「茲ニ最後ノ関ニ立チ重ネテ衷情ヲ披歴スルト共ニ 只管（ひたすら）皇国ノ必勝ト安泰トヲ祈念シツツ永ヘニ御別レ申上グ」と、訣別の電文を送っている。電文の最後に「国の為重きつとめを果し得て 矢弾尽き果て散るぞ悲しき」の歌を書き添えた。どれほど、無念であっただろうか。本土決戦に備えるための時をかせぎたいと沖縄に遣わされた太田実氏は、有名な「沖縄県民斯克戦ヘリ。県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と、電文を送り、6月13日に自決した。彼は自決したが、日本兵と県民は南下して、6月23日まで、戦闘は続いた。彼が自決した日に「白旗」を上げれば、戦死者は少なかったはずである。「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓が犠牲を大きくした。そして、戦後、沖縄は高配を賜ることはなかった。割腹自決をした阿南惟幾陸軍相は「一死以テ大罪ヲ謝シ奉ル」が遺書で、「大君の深き恵に浴みし身は 言ひ遺こすへき片言もなし」と詠っている。戦士たちに言えることは、天皇制に完全に洗脳され、天皇のために死ぬことを至上とする価値に身を献げていることだ。現在も、天皇制の特別視は続いている。